

# 平成30年度中学入試

## [前期B 入試]

### 国語科 問題

#### 注意事項<sup>じこウ</sup>

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は、表紙<sup>ふく</sup>を含めて20ページあります。  
試験中に、印刷が見つらかったり、ページが乱れたり抜け落ちていることに気づいた場合は、手を上げて監督者<sup>かんとくしゃ</sup>に知らせなさい。
3. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離<sup>はな</sup>してはいけません。

[前期B 入試] 受験番号 \_\_\_\_\_

金蘭千里中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちが日本語で書かれた文章を読めば、それが難しいものでないかぎり、そこに何が書かれているのか、その内容を理解できます。しかし内容を理解するとき、自分の頭の中で何が起こっているかまで理解している人はほとんどいないでしょう。

そのことを確かめるために、二つの実験をします。実験といっても、文章を読みながら自分の頭の中で起こっていることを観察するだけです。簡単なテストをやってみるつもりで、取り組んでみてください。

一つ目の実験では、私たちが頭のなかで文章を「映像」として理解しているか、「概念」として理解しているかを確かめます。つぎの文を読んで、その内容を理解してください。

窓の外では雪がしんしんと降っている。

この文を見て、どのように理解しましたか。aコガイで音もなく降りつもっていく雪のイメージを頭のなかで思い浮かべられたのではないのでしょうか。ところが、つぎの文ではどうでしょうか。

雪の元素はH<sub>2</sub>Oである。

もちろん理解できたと思いますが、理解の仕方はまったく違っていたでしょう。この文を読んでも、頭の中に具体的なイメージは思い浮かびません。雪は溶けると水になり、水分子は水素原子二つと酸素原子一つからできている。だから、たしかに雪の元素はH<sub>2</sub>Oになる、と考えたのではないのでしょうか。これは、映像に頼らない論理的な理解です。

「雪がしんしんと降っている」というのは、私たちの体験から映像を再現することができる経験世界の言葉です。それにたいし、「雪の元素記号はH<sub>2</sub>Oである」というのは、【  
】眼で見ることができない【  
】世界の言葉です。

一方、つぎの文はどうでしょうか。

雪は大学入試センター試験の日によく降る。

この文は人によって理解の仕方が異なるでしょう。ある人は、雪が降りしきるなかを受験会場に向かう、受験生の姿を思い浮かべるでしょうし、別の人は、映像を思い浮かべず、センター試験が例年おこなわれる一月中旬は一年でいちばん寒い時期なので、たしかに雪が降る確率が高いという知識として理解するでしょう。

頭のなかを観察してわかることは、私たちは、文章の内容を具体的な体験に結びつけて映像として理解する場合と、抽象的な知識と結びつけて概念として理解する場合があり、それは、文章に盛り込まれている内容や、理解する人の好みによって、影響を受けるということです。

二つ目の実験では、文章を音で理解しているか、文字で理解しているかを確かめてみましょう。つぎの文を読んでみてください。

十日町は、雪国・新潟のなかでも有数の豪雪地帯なので、冬に車で当地を訪れるさいには、吹雪や雪崩に十分な注意が必要です。

ここでは、「雪」のつく言葉、「雪国」「豪雪」「吹雪」「雪崩」に注目してみましょう。それぞれ音読すると、「ゆきぐに」「ごうせつ」「ふぶき」「なだれ」となります。このいずれも、音で理解していると考えられる語です。「せつこく」「ごうゆき」「すいせつ」「せつほう」と読み間違えたら、理解が難しくなるでしょう。おそらく、「雪国」は一目で理解できたでしょうが、きつと「豪雪」「吹雪」「雪崩」は、立ち止まって読み方を考えたり、自分の読み方が正しいか確認したりしただろうと思います。つまり、理解のために頭のなかの音を頼りにしたわけです。

カタカナは外来語を表す文字と考えている人もいると思いますが、外来語ではないのに、「メドが立つ」「カ  
ンが働く」「タガが外れる」「タチが悪い」「コツをつかむ」などと書くケースが最近増えています。「メド」  
「カン」「タガ」「タチ」「コツ」は、漢字で書いても、理解の助けにならないどころか、かえって妨げにもな  
る場合もあるからです。このように、音から理解している言葉は、書き手は外来語でなくてもカタカナ書きにし、

理解が易くなるように、クフウしています。

一方、次の文章はどうでしょうか。

一面に広がる雪原で、雪駄をはいた雪眉の老人が雪塊のうえにひとり腰をおろしていた。

同じように「雪」のつく言葉に注目すると、「雪原」は「せつげん」、「雪駄」は「せつた」、「雪眉」は「せつび」、「雪塊」は「せつかい」になります。しかし、これらは少々読めなくても意味は理解できるため、頭の中なかであえて音にしなかつた人も多かつたのではないのでしょうか。また、「ゆきはら」「ゆきた」「ゆきまゆ」「ゆきかたまり」と間違つて読んでも意味はわかるので、誤つた読み方と知りつつ、その読みで押しとおした人もいるかもしれません。

「雪原」は「雪の野原」、「雪駄」は「雪の下駄」、「雪眉」は「雪のような白い眉」、「雪塊」は「雪の塊」という漢字のイメージで理解できるからです。これらは、音ははつきりしなくても、漢字の字面を手がかりに連想すれば理解できる語です。

このように、私たちの理解は、映像を思い浮かべるときも、概念を論理的に組み立てることもあります。頭の中の音に頼ることも、漢字の字面に頼るときもあります。文章を理解するというのは、じつにふしぎなゲンシヨウです。

ですから、文章理解には、解明する価値のある研究テーマがいくつもあるのですが、本書は予測の本として、文が多数連なつてできている文章を、読み手がなぜ瞬時に、的確に理解できるのかに焦点を絞つて考えたいと思います。

まずは、予測というゲンシヨウそのものを理解するために、一文のなかの予測について簡単な例を二つ挙げておきましょう。一つ目の例は、単文における主語と述語の対応の問題、二つ目の例は、複文における従属節と主節の対応の問題です。

わたしには妻が一人、愛人が二人、非常に親孝行の子供が二人、かわいい子犬が一匹、いればいいなと願っている。

(土屋賢二『われ笑う、ゆえにわれあり』文藝春秋)

おとといも、きのうもカレーやったけど、今日は思いきって、カレーにしよ！

(映画『ホーホケキヨ』となりの山田くん』お母さん・まつ子のセリフ 制作/スタジオジブリ)

それぞれの文に ユーモアが感じられるのはなぜでしょうか。

一つ目の例では、「わたしには妻が一人、愛人が二人、非常に親孝行の子供が二人、かわいい子犬が一匹、」とくれば、「」という事実を予測するのですが、「いればいいなと願っている」という願望がくるそのズレがおかしいのでしょうか。

二つ目の例では、「おとといも、きのうもカレーやったけど」とくれば、二日連続のカレーに飽き飽きしている家族は、「」【今日の献立こんだてが変わると思うでしょう。さらに、「今日は思いきって」と続きますから、」【」をキdタイしそうなところでは、それが、「」【であるというところにおかしみがあります。

言語を理解するときになぜ予測が問題になるかという点、言語は一本の線であり、頭から順に読むようにできているからです。頭から順に読む力。テイじょじょで徐々に意味が見えてくるという性質が言語にあり、その線的な性質が予測を生むのです。

(石黒圭『「予測」で読解に強くなる!』より 一部改めたところがある)

(一) 太線部 a ～ e のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字になるものを、それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a	コガイ	ア	大統領がライニチする	イ	カコを思い出す
		ウ	コキヨウを思う	エ	イツコダテの家
b	クフウ	ア	薬がニガい	イ	ハイクを始める
		ウ	コウバで働く	エ	ククを覚える
c	ゲンシヨウ	ア	人のイツシヨウ	イ	国のシヨウライ
		ウ	キシヨウ予報士	エ	シヨウタイ状をおくる
d	キタイ	ア	タイサクを練る	イ	ホウタイを巻く
		ウ	出番までタイキする	エ	タイドが悪い
e	カテイ	ア	一時間テイド遊んでくる	イ	車がテイシする
		ウ	コウテイで遊ぶ	エ	いすをコテイする

(二) 傍線部「一つ目の実験」とあるが、その結果分かったこととしてもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文章内容を理解するとき、人はまず文章に自分の知識をあてはめようと努力するところから始める。  
イ 同じ文章でも、その内容を体験にもとづいた映像として理解するかどうかは、人によって異なる。  
ウ 知識として文章内容を理解するとき、さらに人は頭の中でそれを映像化しようとする場合がある。  
エ 文章に書かれている内容によって理解の仕方は左右されず、その傾向がぶれることはほとんどない。  
オ 文章の内容を理解するとき、人は自らの経験をもとに概念を思い浮かべることがある。

(三) 傍線部「映像」とあるが、同じことを表している四字のことはを、本文中から抜き出しなさい。

(四) 「」にはどんなことばが入るか、漢字一字で答えなさい。

(五) 「**えなさい。**」にはどんなことばが入るか、もっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア 虚構<sup>きょこう</sup>      イ 情報      ウ 論理      エ 想像      オ 記号

(六) 傍線部「二つ目の実験」とあるが、その結果分かったこととして適切でないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば「豪雪」「吹雪」という言葉を音で理解することは、一般的には難しいことではない。

イ 音で理解しているのとらえられる語は、わざとカタカナにして理解の助けとする場合がある。

ウ 完全に間違った読み方をしていても、漢字を字面で理解することは時に理解の助けとなることがある。

エ 言葉を理解するとき、音より字面に頼ったほうがはつきりとわかる場合が多い。

オ 字面で言葉を理解するとき、その音をはつきりさせないまま読み進めることも時には可能である。

(七) 傍線部「私たちの理解」について、筆者の考えとしてもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私たち人間は、文章の内容をなるべく正確に把握<sup>はあく</sup>するために、何をもとに理解するか、分かったうえで判断しているといえる。

イ 文章の理解の仕方にはさまざまなパターンがあり、人は成長していくにつれて、どれか一つの型を身につける。

ウ 文章を理解するとき、人間の頭の中で何が起こっているかは、簡単な実験で知ることができ、その詳細<sup>しよつさい</sup>は現在明らかにされている。

エ わかりにくい語をカタカナ表記にするなど、人は文章を理解するためのさまざまな方法を、知らず知らずのうちに選択<sup>せんたく</sup>し使っている。

オ 私たちはどんな日本語の文章でもたやすく理解することができ、それは興味深いことであり、研究するにふさわしいテーマである。

(八) 傍線部 「ユーモアが感じられるのはなぜでしょうか」とあるが、その理由としてもっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は目に入った情報の処理のみ瞬間に行いながら文章を読み進めるが、読み進める途中で意外性のある内容が目に入ると、あえて立ち止まりその意外性を楽しむから。

イ 人は的確に予測をしながら文章を読み進めるが、その予測が当たらなかつたとき自らの考えが一般と比べてずれているのかもしれないとおかしさを感じてしまうから。

ウ 笑いのセンスがある人は、本来ならAと予想しながら読むところを、あえてそこからずれたBと予測して読むことができるため、オチのところ優越感にひたれるから。

エ 人には、展開を予想しながら文章を読み進めるという性質があるにも関わらず、あえて予想と大きく外れる文章を書いてくる書き手にあきれてしまうから。

オ 文章の意味を頭から徐々にとらえていく中で、「次はこうくるに違いない」と考えながら読んでいたにも関わらず、それが外れてしまったところが面白いと感じるから。

(九) 傍線部 でいう「ユーモアが感じられる」例文として適切でないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 塀へいを乗りこえようとしていたところ、ガードマンが急いで走ってきて、「こっちのほうほうが乗り越えやすいよ」とアドバイスをくれた。

イ 毎日のお弁当には、白いご飯に赤い梅干し、卵焼き、からあげ、きんぴらごぼう、そしてデザートデザートのフルーツが、入っていないいなかつた。

ウ がんばって、がんばりぬいたその先に、希望が見えると信じてがんばったところ、本当に未来が開けてきたので努力してよかつたと思つた。

エ いろんな種類のペットを飼つているという友人の家に行くと、まだら、白、黒、茶色など、いたのはたくさんたくさんの色の犬いぬだつた。

オ 好きなことを三つあげると言われたら、第一に飛行機を見ること、第二に飛行機に乗ること、第三に白米を食べることだと答えるだろう。

(十) 【 】にはどんなことばが入るか、ひらがな二字で答えなさい。

(十一) 【 】にはどんなことばが入るか、もっとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まさか      イ とうてい      ウ さらに      エ さすがに      オ なるほど

(十二) 【 】にはどんなことばが入るか、もっとも適切なものの組み合わせを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	手の込んだメニュー	今日もまた同じ手抜きメニューのカレー
イ	同じく手抜きメニューのカレー	いつもの親しみのあるカレー
ウ	同じく手抜きメニューのカレー	今日もまた同じ手抜きメニューのカレー
エ	手の込んだメニュー	いつもの親しみのあるカレー

(十三) 本文の内容に合うものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 予測して文章を読むというのは、日本語の読み手であった先祖が発展させてきたものである。

イ 文章の理解の仕方を実験した結果、言葉を音に頼って理解する場合があることが分かった。

ウ 日本語には様々な表記の仕方があるが、時にカタカナが理解の妨げになることがある。

エ 文章にユーモアを感じるかどうかは、人それぞれの感性によるところが大きい。

オ 予測しながら文章を読むというのは、最後の結末を意識しながら読むということである。

カ 言語の線的な性質を念頭において読めば、その内容を滞りなく理解することができる。

キ 人は文章を頭から読み進めるため、予測しながら徐々にその意味を理解していく。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

弟ピーターと木の中に家を作ることを楽しみにしていた夏休みに、ピーターははしかにかかり、トムは隔離されて、おじ夫婦のアパートに住むことになった。遊び場所もなく退屈しているトムだが、そのアパートの共用スペースにある大時計が真夜中の時を告げると、異空間があらわれ、不思議な体験をする。その異空間ではアパートは一つの大きな家であり、外には煉瓦塀で囲まれた庭園が広がっている。トムはその庭園で退屈をまぎらわすとうと自由に遊ぶのだが、その異空間では自分の姿が誰にも見えないのだということに気づく。ただひとりハティという少女を除いて。次の場面は、そのハティがとめるのもきかず、トムが好奇心から、庭の周りを囲む高い煉瓦塀にのぼった場面である。

「トム、庭園のむこうの方に何が見えるの？」つよい好奇心のために（注1）ハティが、トムを見上げてささやいた。

「きみがここへあがってきて、自分の目で見られるといいのになあ……」と、トムは言った。トムのそのことばは、庭園ぜんたいの上を流れていった。

ハティが自分の目でこれを見ないことには、この遠い眺めを正確につたえることはとてもできないと、トムは思った。たいらでなだらかなこの地方では、ちよつと高いところのぼりさえすれば、山の頂にのぼったようにひろびろとした景色が見わたせた。これまでトムは、庭園と、庭園のほんのぐるりしか知らなかったが、いま煉瓦塀のてっぺんに立っているトムの目の前には、ひろいひろい世界がひろがっていた。

「ねえ、なにが見えるかおしえてよ。」と、ハティがせつついた。

「そうだな。塀の上からはまず川が見える。」と、トムははじめた。「川にそって、ずうっと見ていくとね……」

「ええ、なにがあるの？」ハティがささやいた。

トムは自分が言いかけたことをしまいまで言わなかった。（注2）アベルが、立木のかどをまがってやってくるのが……。アベルは走ってきた。まっすぐにハティのところへ駆けつけてくると、アベルはハティの肩に両手をおいていきなりおさえつけたので、ハティはよろよろとしてひざまずいた。（A）アベルは、ハティ

イの手の中になにかを投げこむようにしてわたすと、自分はそのそばに立ったまま、ひくい早口でなにかを言いはじめた。返事をしていいるハテイの声がトムのところまできこえてきたが、ハテイはおびえているようだった。ふたりがどんなことを話しあっているのかは、トムにはわからなかった。

トムはいそいで塀の上をもどり、ナシの木づたいに塀からおりて、庭園へもどった。そのときはもう、ハテイはひとりだった。

「いつたい、どうしたんだ？」と、トムがきいた。

「アベルは、わたしが塀の上を歩こうとしていると思つたのよ。」と、ハテイはいった。「( B )、あぶないからよせつていったの。」

「ぼくはまた、アベルがきみをなぐるうとしていいるのかと思つた。」

「アベルはわたしをひざまずかせると、聖書の上に手をおいて誓ちかわせたの。日時計のある塀にはぜつたいにのぼりません、塀の上はぜつたいに歩きません、つて。」

「うんと　　いたかい？」と、トムがきいた。

ハテイは、ゆっくりとこたえた。「うん。なんだか……アベルは……とてもこわがつてるみたいだったわ。」

「こわがつてる？」トムは、まゆをしかめた。「こわがつたのはきみで、アベルは怒おこったんだろ？」

「ちがうわ。アベルはいきなりやってきて、ものすごい力でおさえつけたから、わたし、こわがつてるひまななかなかった。だけど、アベルはたしかにこわがつていたわ。なにかひどくこわがつていたわ。わたしの手に聖書をもたせようとしたとき、アベルの手はともつめたかつたし、ふるえていたもの。」

「だけど、　　どうしてアベルはきゆうにきみが塀にのぼろうとしているなんて考えたんだらう？」

「わたしが、　　いかに塀にのぼりたそうな顔をして上を見あげていたからでしょ。」

「いや、そうじゃないな。」と、トムは言った。「立木のかどをまわってきたときには、アベルはもう走つていたよ。アベルは、きみが見えるようになるまえから、もう聖書を手にして走つてきたんだよ。」

「わたしが、塀の上にいるあんたと話しているのが聞こえたからでしょ。」

「それもちがうな。だって、きみはひくい声でささやくように話してただけじゃないか。( C )、ぼくの

声もアベルには聞こえなかつたはずだ。」

これは、トムがしずかに話していたという意味ではなかつた。じっさいに、トムはしずかに話してなんかいな

かつた。トムが言おうとしたのは、じぶんが力いっばいさけんでいたにしても、じぶんの声はアベルの耳には聞こえなかつたはずだという意味だつた。

「じゃあ、（注3）スーザンが寢室の窓からわたしを見下ろしていて、アベルにおしえにいったのかもしれないわね。」

「きつと、そうだろう。スーザンが窓から首をだしているのが見えたから。」と、トムはこたえた。しかし、その説明でもなんとなくものたりなかつた。

やがてハテイとトムは木の中の家をつくりにでかけた。仕事に夢中になつてゐるあいだに、アベルのふしぎな行動のことはまもなく忘れてしまつた。

【中略】

「ハテイは、木の中の家をつくるために熱心にはたらいっている。」と、トムはピーターにあてた手紙の中に書いた。「ハテイはその計画が気に入つてゐるのだ。」これは、うんとひかえめに書いてゐるので、じつさいにはハテイは、トムがびつくりするほど木の中の家のことに夢中になつてゐた。ひとつには、ハテイはそれをじぶんの家だと思つてゐるのだつた。邸宅（ていたく）はおばさんの家であり、（注4）いとこたちの家であつて、ハテイはただおなさけでそこに置いてもらつてゐるだけのことだが、この木の中の家はハテイのじぶんの家、じぶんの家庭だつた。彼女は、この家にお人形のままごと道具をもつてくるんだとか、邸宅の使つてない寢室からいろいろな品ものをちよるまかしてきてすえつけるんだとか、夢中になつてしゃべりつづけた。トムはおどろいて、頭をすこし冷やしてやらなければならなかつた。

それからまた、この木の中の家がハテイの氣にいつてゐるのは、ここが庭園の中でいちばんいいかくれ場所だからでもあつた。

「つくつてゐるところを見られさえしなければ、こんなところに家があるなんて、だれも思わないわ。」と、ハテイは言つた。「いとこたちは、ひとりも知らないのよ。」

「アベルに見られなかつたかい？」と、トムがきいた。

「アベルは、わたしはザイアリヨウをはこんでゐるところも、木にのぼつてゐるところも、こつちの方へくるところも、見たことはないわ。わたしはアベルに見られないように、うんと氣をつけたんですもの。」

「ぼくは、そんなことはちつとも氣にかけなかつた。」と、トムが言つた。「どつちみち、アベルはぼくが見え

ないんだから。」

「そうね。」とハティはこたえたが、まえに幽霊ゆうれいのことでけんかをして、どっちが幽霊か言いあらそったことを思い出したので、その話はいそいでやめてしまった。

( D )、アベルは木の中の家のことをちやあんと知っていたことが、あとになってわかった。

その日の午後、アベルはイチゴ畑の網あみをかぶせながら、庭園の中ではたらいていた。ハティとトムは、木の家の外のぼつていくまえには、かならずアベルやそのほかの人たちが庭園のどのあたりにいるかたしかめることにしていたので、そのことをシヨウチシヨウチしていた。このときは、庭園にはアベルしかいないこと、アベルは少しはなれたところで仕事をしていることを確かめてから、ふたりは木にのぼつていった。

家はもうできあがっていた。しかし、ハティにはまだ大きな望みがあった。

「ほんとうの家らしくするには、と、ハティは言った。「ちゃんとした、ただの穴でない窓がなきゃ、だめね。」窓の形は、邸宅の窓とおなじように、タテにながくなければ、とハティは言った。

「きみは欲がふかすぎるよ。」と、トムはブツブツ言った。それでけつきよく、ハティは自分ひとりで窓をつくらなければならなかった。窓は二つだった。

それは、窓というよりは、でこぼこした穴とでもいった方がよかった。ハティは、(注5)窓のわくにそつてイチイの枝をたばねたり、まっすぐにしたりする仕事を、窓の内側からも、外側からも、しんぼうよくつづけた。

トムは、ぜんぜん手伝わなかった。今のところはまだとてもその望みはないけれども、そのうちにハティが窓をつくるのにあきてくれないかな、と思っていた。そうしたら、もつとおもしろい考えをおしえてやろう。

これは海の上にかんんでいる汽船の船長室で、これはその丸窓まるまどなんだって。

ハティは、いつまでたつても窓をつくる仕事をやめようとはしなかった。ハティは鼻歌をうたいながら、木の家の壁かべの外にある枝から枝へと移つていたが、途中で手をやすめてトムにきいた。「トム、こつち側にひびのいつた枝があるわ。これ、だいじょうぶ？ あんた、この枝の上につたの？」

「ひびのはいつた枝だつて？」と、トムは言った。「ああ、そうか。ぼくはその枝にのつたよ。」ハティの鼻歌がまた元気よくはじまつて、ハティはまた動きはじめた。「( E )、と、トムは言い足そうとした。「ぼくは、きみとはちがうんだよ、きみは……」

トムは見たわけではなかったが、ひびのはいつた枝は、ハテイが最初の重みをかけるとすぐに折れはじめた。枝がひきさかれる音がしたかと思うと、ハテイの「おお！」という小さなさけび声が聞こえた。そのさけび声は、一秒とたたないうちに、墜落していくハテイの金切り声にかわった。

糸のように「ボソク」、調子の高いハテイのさけび声は、庭園全体にひびきわたった。小鳥たちは、その声をきくと飛び立って、四方に散っていった。ハシバミの切株のてっぺんを走っていた赤いリスは、枝の上に凍りついてしまったように。そしてアベルは、アベルは両腕いっぱいにかかえていたイチゴの網を放り出して、イチイの木の方へ駆け出した。

トムはイチイの木から一気にとびおりて、ネコよりも身がるにハテイのそばに立った。ハテイはもう鼻歌もろたわず、からだをまるめて、じいつと地面に横たわっていた。落ちるときに、エプロンがまくれあがったのだらう。そのすその方がハテイの顔にかぶさっているが、ひたいの上あたりにさわっているエプロンの生地には、血がにじんでいた。

手のくだしようもなく、トムがぼんやりつつたっていると、そこへアベルが駆けつけてきた。血を見るとアベルは大きな声をあげてうめいた。アベルは両腕でハテイを抱きあげ、邸宅の方へ運んでいきはじめた。トムはそのあとについていこうとした。

すると、アベルはいきなり立ちどまって、半分ほどふりむいた。アベルの顔がちょうどトムのいる方へ向けられた。あまりにも思いがけないできごとにより、トムは、アベルはいま自分のからだを見通しているのではない、自分をちゃんと見つめて、何か言おうとしているのだと気がついた。

「とつとと失せやがれ！」と、アベルはしゃがれた声で言った。

トムも、アベルをにらみかえした。ふたりは、どちらも身動きひとつしなかった。

「おまえが出てきた地獄へさっさとかえれ！ おれはおまえをよく知ってるんだぞ。いつでも見ていたが、見えないふりをしていた方がいいと思っただけだ。いつでもおまえの言うことは聞こえていたが、聞こえないふりをしていた方がいいと思っただけだ。しかし、おれはおまえをよく知ってるんだ。おまえの正体はちゃんとわかってるんだぞ！」

トムは、何を言われても知らん顔をしていた。ただ、アベルには自分の言うことがちゃんとわかるし、だから返事もできるといふことだけを耳に聞きとめた。

「ねえ。ハティは生きてるの？ それとも死んじゃったの？」トムは、大きな声をあげてきいた。

「おまえは、これまで何度もこの子を殺そうとした。父親も母親も家庭もないこの子を　まるで無邪気な罪のないこの子を、（注6）弓と矢だの、包丁だの、煉瓦塀だの、いろんなわるだくみをして殺そうとしたんだ！ さあ、とつとと失せやがれ！」

トムは立ちさらなかった。ハティをずっと両腕でかかえていたアベルは、芝生を横ぎって邸宅の方へ後ずさりしはじめた。後ずさりしながら、アベルは大きな声で祈りのことばをくりかえした。

「……神さま。悪魔がわたしをキズつけないように、どうかわたしを悪魔のすべてのたくらみからおまもりください。」アベルの声はふるえていた。彼はハティのからだをかかえ、目はトムにすえたまま、よろめくように後ずさりしながら、ドアへの階段をあがり、庭園の戸口をくぐった。ドアがガチャーンとしめられたと思うと、中で鍵を閉める音がきこえてきた。

（フィリパ・ピアス　高杉一郎訳　『トムは真夜中の庭で』より　一部改めたところがある）

（注1）ハティ：真夜中にあらわれる庭園に住む一家にひきとられた少女。両親を幼い頃になくし、遠縁のおばにひきとられた。おばからもいとこたちからもうとまれている。

（注2）アベル：真夜中にあらわれる庭園に住む一家の庭師。心やさしい庭師で、ハティのことをいつも気にかけている。

（注3）スーザン：真夜中にあらわれる庭園に住む一家の女中。

（注4）いとこたち：真夜中にあらわれる庭園に住む一家の子どもたち。

（注5）窓のわくにそつてイチイの枝をたばねたり、まっすぐにしたりする仕事：この家はイチイの木の枝をひっぱたり、いっしょに編んだりして壁をつくっている。

（注6）弓と矢だの、包丁だの：以前トムはハティに包丁を持ち出させて、木の枝をけずって弓と矢をつくることを教えた。

(一) 太線部 a、e のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字になるものを、それぞれ次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

a	ザイリヨウ	ア	ここは日本のリヨウカイだ	イ	リヨウシキある行動
		ウ	物事のリヨウメンを見る	エ	キュウリヨウをもらう
		オ	自動車をリヨウサンする		
b	シヨウチ	ア	キシヨウ転結のはつきりした文章	イ	合格してバンザイサンシヨウする
		ウ	彼はおだやかなキシヨウだ	エ	これはキシヨウな植物だ
		オ	無実をシヨウメイする		
c	タテ	ア	教育にジユウジする	イ	アメリカにテイジユウする
		ウ	ジユウニシを覚える	エ	失礼はジユウジユウおわびいたします
		オ	日本をジユウダンする		
d	ホソク	ア	私はワサイが得意です	イ	サイダイもらさず報告する
		ウ	サイセイ <small>いりょう</small> 医療	エ	サイシヨク主義者
		オ	植物をサイシユする		
e	キズ	ア	手をシヨウドクする	イ	白砂セイシヨウの景勝地
		ウ	カンシヨウにひたる	エ	名月をカンシヨウする
		オ	試合でカンシヨウした		

(二)

ら一つ選び、記号で答えなさい。にはどんなことばが入るか、もっとも適切なものを、それぞれ次のア、イ、ウの中から

ア 見えたからだ イ 見えそうだった ウ 見えたようだった

エ 見えるだろう オ 見えるかもしれない

ア こわがって イ 誓わせようとして ウ おこって

エ ふるえて オ なぐるうとして

ア 死んでしまった イ 逃げ出した ウ すごえていた

エ 動かなくなった オ すべっていた

(三)

ら一つ選び、記号で答えなさい。(同じ記号をくりかえし使ってはいけない)

ア しかし イ それで ウ それに エ それから オ ただねえ

(四)

傍線部「アベルは……とてもこわがってるみたいだったわ」とあるが、なぜアベルはこわがっている様子だったのか、答えとしてもっとも適切なものを、次のア、イ、ウ、エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 異空間に連れ去られることをおそれているので。

イ 怒りのあまり手も冷たくなりふるえていたため。

ウ トムを地獄からきた悪魔だと思っっているため。

エ ハテイが塀の上を歩くことを心配しているため。

オ ハテイが神の罰を受けないか心配しているため。

(五) 傍線部 「どうしてアベルはきゅうにきみが塀にのぼろうとしているなんて考えたんだろう？」とあるが、  
答えとしてもっとも適切なものを、次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ハテイを塀の上のぼるようと誘<sup>さそ</sup>うトムの声が聞こえたので。  
イ ハテイがいかにも塀にのぼりたそうな顔をしているのが見えたので。  
ウ 寝室の窓から顔を出してハテイを見ていたスーザンが教えたので。  
エ いかにも塀の上のぼりたそうなハテイの声が聞こえたので。  
オ まえまえからハテイが塀にのぼるのではないかと注意していたので。

(六) 傍線部 「いかにも」が直接かかっている部分を次のア、クの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
ア わたしが イ 塀に ウ のぼりたそうな エ 顔を オ して  
カ 上を キ 見あげて ク いたからでしょ

(七) 傍線部 「ハテイはその計画が気に入っているのだ」とあるが、なぜ気に入っているのか、答えとして適  
切なものを、次のア、オの中から二つ選び、記号で答えなさい。  
ア トムと二人で力を合わせて作った特別な家だから。  
イ この家が誰も知らない、いいかくれ場所であるから。  
ウ この家にお人形などを持ち込みたいと思っているから。  
エ この家こそが自分の本当の家だと思っっているから。  
オ 自分で作ったただの穴でないちゃんとした窓があるから。

(八) 傍線部「望み」の内容としてもつとも適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 邸宅の窓と同じような窓をつくること。

イ 窓をつくるのにあきてしまうこと。

ウ ひびのはいつた枝の上ののること。

エ ふたりでいっしょに窓をつくること。

オ 汽船の船長室のような丸窓をつくること。

(九) 傍線部「あまりにも思いがけないできごと」とあるが、このことを説明した次の文章の( )に

はどんなことばが入るか、もつとも適切なものを、本文中の【中略】より後の部分から十一字で抜き出して答えなさい。(句読点を含む)

【「( )」とトムは思っていたが、実はそうではないことが分かったということ】

(十) 傍線部「おまえは、これまで何度もこの子を殺そうとした」とあるが、トムのこのことばを指して、このようにいつているのか。本文中の【中略】の前の部分から抜き出し、最初の五文字を答えなさい。(記号は含まない)

【問題は以上で終わりです】

(一)	a		b		c		d		e	
(二)										
(三)										
(四)			(五)		(六)					
(七)			(八)		(九)					
(十)										
(十一)			(十二)		(十三)					

(一)	a		b		c		d		e	
(二)										
(三)	A		B		C		D		E	
(四)			(五)		(六)					
(七)										
(八)										
(九)										
(十)										

得点	取巻時間

(60点満点)

- (一) a エ b ウ c ウ d ウ e ア x 5 (十点)
- (二) イ (四点)
- (三) イメージ (二点)
- (四) 肉 (二点)
- (五) ウ (四点)
- (六) エ (四点)
- (七) エ (四点)
- (八) オ (四点)
- (九) ウ (四点)
- (十) いる (四点)
- (十一) エ (四点)
- (十二) ア (四点)
- (十三) イ・キ (順不同) x 2 (十点)

(60点満点)

- (一) a エ b ア c オ d イ e ウ x 5 (十点)
- (二) ア ウ エ x 3 (九点)
- (三) A エ B イ C ウ D ア E オ x 5 (五点)
- (四) ウ x 1 (五点)
- (五) ア x 1 (五点)
- (六) ウ x 1 (三点)
- (七) イ・エ (順不同) x 2 (六点)
- (八) イ x 1 (五点)
- (九) アベルはぼくが見えない x 1 (六点)
- (十) きみがここ(きみがここへあがってきて、自分の目で見られるといいのになあ……) x 1 (六点)